

### ③ 第3委員会

## 「読書に親しみ、くらしを豊かにするまちづくり」



それでは、第3委員会の意見を発表します。

第3委員会のテーマは、「読書に親しみ、くらしを豊かにするまちづくり」です。

このテーマについて考えるため、私たちは、7月25日に、鶴舞中央図書館の施設見学を行いました。

そこで、私たちは、書庫、貴重書庫、図書館の人々の工夫、点字文庫などを見ました。そして、約130万冊の本があり、それらの本は、図書館の人が命よりも大切と思って守り続けていたり、全ての人が使えるという工夫がされていることがわかりました。

その後、私たちは、施設見学をしてわかったことや思ったことをもとに、名古屋を「読書に親しみ、くらしを豊かにするまち」にするためには何をすればいいか考えました。

それでは、僕たちが考えたことを順番に発表します。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

僕が、鶴舞中央図書館に行って思ったことは、図書館の中にはたくさんの方があるということです。その中の一つとして、1館につき約650万円を1年間でやりくりしているということです。

僕は図書選択室を見て約1200冊の中から司書と呼ばれる図書館の人が選ぶことは大変だと思いました。また、点字の本など、皆さんの近くにあっても見過ごしていることが多いと思いました。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

私は、読書をするのはとても大切だと思います。なぜなら読書をすると思ったり考えたりして、さまざまな力を育み、学ぶことができるからです。たくさんの方に興味を持つことで読書が好きになって、親しむことができると思います。名古屋市には約300万冊の本があり、読める本もたくさんあります。

また、読書に親しむことにより、新たな発見や考えがたくさん見つかると、その発見や考えを違うところでも生かすことができます。だから読書は想像や考えも豊かになるので、暮らしも豊かになると思います。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

読書をするといろいろな人や昔の人の考えを知ることができるので、考え方が広がり、みんなと楽しく話すことができます。僕は母と小さいころから図書館へ行っていたので、身近な場所でした。でも、うるさくしたり走り回ったりして静かにしようねと注意を受けたことがありました。だから、赤ちゃんや子ども、お母さんたちが図書館で自由に過ごせる部屋があれば行きやすくなると思います。そうすると図書館や本が好きになるので、みんなと楽しく話せるようになり、暮らしが豊かになると思います。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

「読書に親しみ、暮らしを豊かにする」には、読書をする機会を見つけないといけないと考えています。特に子どもが小さいうちから読書をするといいと思います。なぜなら大人になる前の子どものうちに読書をする習慣を身につけておくと、将来その子どもが大きくなったら読書をする大人がふえると考えたからです。その習慣を身につけるには、子どもが好きなスタンプラリーがよいと思います。そして、スタンプラリーが好きではなく、本が好きにだんだんなっていくといいと思います。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

私は、「読書に親しみ、くらしを豊かにするまち」にするには、本の楽しさを知ってもらうことが大切だと思います。そうすれば、みんなが本を読むようになります。本を読めば心が豊かになります。そうすると暮らしも豊かになります。でも、本の楽しさは誰かがみんなに広げていかなければなりません。本を読むとすごくリラックスできるし、表現や考えが広がります。本を読むことによるメリットを伝えていかなければなりません。だから、皆さんに本の楽しさを広げていきたいと思っています。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

本は、感性や好奇心を生み、より深く豊かに生きるための力となっています。今回鶴舞中央図書館で書庫、点字文庫、図書選択室を見学しました。

昭和20年3月19日の名古屋空襲により、本館が消失してしまいましたが、昔の古いものが残っているので、人の思いを感じ取れる大きな名古屋市の財産だと私は思いました。

その財産を私たちは次の世代へ受け継いでいかなければならないと思っています。本は心を豊かにします。私は心の豊かさを多くの人に知ってもらい、日本一、いや世界一の読書のまちにしたいです。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

<sup>わたし</sup>私は、名古屋を「読書に親しみ、くらしを豊かにするまち」にするためには、知らないことがよくわかる読書に親しみを持ってほしいと思います。なぜかという、<sup>わたし</sup>私たちが行った鶴舞中央図書館には、とても古い本や新聞、雑誌などがあり、<sup>わたし</sup>私たちが知らなかったことなどがよくわかって、とてもよかったと思ったからです。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

<sup>わたし</sup>私は、「読書に親しみ、くらしを豊かにするまち」にするためには、まず読書に親しまなければならないと思います。そのために1週間に1冊本を<sup>さつ</sup>読んでみてください。すると次第に本が好きになっていくと思います。こうしてたくさんの方が本を好きになったら、暮らしが<sup>く</sup>どんどん豊かになっていくと思います。これで<sup>わたし</sup>私の発表を終わります。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

私は、「読書に親しみ、くらしを豊かにするまち」にするためには、まず図書館が私たちの身近にあるということを知ってもらうことが大切だと思います。図書館では、本を読む、借りる以外にも自習室で勉強ができたり、点字について学ぶ講習などもやっています。

このようなことを学校や図書館などで皆に知ってもらえるよう発信する機会があるとよいと思います。

## ○子ども議員

第3委員会の子ども議員です。

鶴舞中央図書館には、約130万冊の本があります。私たちがふだん見られるのは30万冊で、残りの100万冊は、書庫に保管されています。そこには戦前からずっと残っているととても貴重な本もあります。なので、これからも残していかなければなりません。

私は本が大好きで北図書館の子ども司書にも応募しました。私にとって本はなくてはならない存在なのです。だから、今よりもっとたくさんの人に本のよさを知ってもらいたいです。よりよい名古屋市を目指したいと思います。

## ○子ども議員

僕が鶴舞中央図書館に行って驚いたのは、目の不自由な方でも読めるように、点字の本や聞く読書という、ふだんは余り見ないものがたくさん置いてあったことです。それと鶴舞中央図書館の一般の人が見られる場所にある本は、ほんの一部で、書庫には本当に驚くべきの数がありました。あと、図書館の人の工夫もたくさんありました。例えば本が長く使えるようにかたい表紙にかえたり、古い新聞や新聞に載っている記事をファイルに閉じてあったりと、図書館の書庫にはそういった図書館の人の工夫がたくさんありました。

私たち第3委員会は、このようなことが名古屋を「読書に親しみ、くらしを豊かにするまち」にするために必要だと考えました。  
これで、第3委員会の発表を終わります。



## ■ 田中教育子ども委員長の答弁

ある都市のある教育委員会のある先生がこんなことを言っておりました。本をたくさん読むと必ず成績は上がる。成績のことだけじゃないんです。本を読むということは本当にいいということは、誰もが、読む人も読まない人もみんな思っているんです。だけど、今なかなか読む人が少なくなっている、活字離れが進んでいる、そういったことを言われている中、この第3委員会に集まっていた



いた委員の皆さんは、みんな本が好きで、読書が好きで、だけど、学校の周りを見ていると、なかなか本を読む人が少ない、そういう憂いも持ってこの議会、委員会に参加してくださいました。

そういった自分の疑問点を持っているからこそ、今発表していたみたい、こうしたらいい、ああしたらいい、子どもがもうちょっと騒げる場所があってもいいんじゃないか、本を読むためには1日1冊義務づけよう、いろんな細かい提案をしてくださいました。

私たちは、本当に皆さんが気づいたこと、そうだなと思いながら私たちもこれから名古屋の中で生かしていこうと思っています。

私が一番すごいなと思ったのが、鶴舞図書館に行ったときに、本の貸し借りだけではなくて、皆さんがその図書館で見えないものをきちんと見てくださったことです。

例えば限られた予算の中で本を選ぶ人たちの作業、点字をまめにこつこつやって点字の本をつくっている人たちの作業、そして表には出ないけれども、本を大切に大切に、それこそ命をかけて守って

きてくださった方の作業、そういったいろんな作業、陰<sup>かげ</sup>の作業を見てくださった皆<sup>みな</sup>さんの行動、気持ち、本当にうれしく思っています。

皆<sup>みな</sup>さんが、この議<sup>ぎ</sup>会の中<sup>ちゆう</sup>でいろんな疑<sup>ぎ</sup>問<sup>もん</sup>を持って、そして考<sup>く</sup>えて提<sup>てい</sup>案<sup>あん</sup>をしていただきました。でも、この議<sup>ぎ</sup>場<sup>ばう</sup>を出<sup>い</sup>たら、行<sup>ぎやう</sup>動<sup>どう</sup>するということもこれに一つ加<sup>か</sup>えなければいけません。行<sup>ぎやう</sup>動<sup>どう</sup>するのはなかなか大<sup>だい</sup>変<sup>へん</sup>です。行<sup>ぎやう</sup>動<sup>どう</sup>するために今回<sup>こんかい</sup>この議<sup>ぎ</sup>会<sup>かい</sup>という、委<sup>い</sup>員<sup>いん</sup>会<sup>かい</sup>というところ<sup>ところ</sup>で学<sup>まな</sup>んだ人<sup>ひと</sup>の話<sup>わたり</sup>を聞<sup>き</sup>く、そして自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>を言<sup>い</sup>う、そしてそれをま<sup>ま</sup>とめ上<sup>あ</sup>げるとい<sup>い</sup>うことは、これからの人<sup>ひと</sup>生<sup>せい</sup>におい<sup>い</sup>ても大<sup>だい</sup>変<sup>へん</sup>大<sup>だい</sup>切<sup>せつ</sup>なこ<sup>こ</sup>とだと思<sup>おも</sup>いますし、重<sup>じゆう</sup>要<sup>よう</sup>なこ<sup>こ</sup>とです。

ぜ<sup>ぜ</sup>ひこれから<sup>これから</sup>もま<sup>ま</sup>すま<sup>ま</sup>すい<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>ん<sup>ん</sup>なこ<sup>こ</sup>とを考<sup>く</sup>えて疑<sup>ぎ</sup>問<sup>もん</sup>を持<sup>も</sup>って提<sup>てい</sup>案<sup>あん</sup>して、そして行<sup>ぎやう</sup>動<sup>どう</sup>してい<sup>い</sup>って<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>き<sup>き</sup>たいと思<sup>おも</sup>ってお<sup>お</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>す。困<sup>こま</sup>ったこ<sup>こ</sup>とがあ<sup>あ</sup>つたら、き<sup>き</sup>ょうこ<sup>こ</sup>こに<sup>に</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>っ<sup>し</sup>ゃ<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>すお<sup>お</sup>兄<sup>あに</sup>さん<sup>さん</sup>やお<sup>お</sup>じ<sup>おじ</sup>さん<sup>さん</sup>やお<sup>お</sup>姉<sup>あね</sup>さん<sup>さん</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>言<sup>い</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さい。

私<sup>わたし</sup>は大<sup>だい</sup>ざ<sup>ざ</sup>っ<sup>ぱ</sup>な運<sup>うん</sup>営<sup>えい</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した<sup>た</sup>ので、細<sup>こま</sup>かいと<sup>と</sup>ころ<sup>ろ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>気<sup>き</sup>づ<sup>づ</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>した吉<sup>よ</sup>田<sup>しだ</sup>、浅<sup>あ</sup>井<sup>さい</sup>両<sup>りやう</sup>副<sup>ふく</sup>委<sup>いん</sup>員<sup>いん</sup>長<sup>ちやう</sup>に感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>を<sup>を</sup>申<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>上<sup>じやう</sup>げ、そ<sup>そ</sup>して<sup>して</sup>袴<sup>は</sup>田<sup>かまた</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>にも心<sup>こころ</sup>から感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>を<sup>を</sup>申<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>上<sup>じやう</sup>げ、こ<sup>こ</sup>の委<sup>いん</sup>員<sup>いん</sup>会<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>とめ<sup>め</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>いた子<sup>こ</sup>ども<sup>ども</sup>委<sup>いん</sup>員<sup>いん</sup>長<sup>ちやう</sup>、そ<sup>そ</sup>して子<sup>こ</sup>ども<sup>ども</sup>副<sup>ふく</sup>委<sup>いん</sup>員<sup>いん</sup>長<sup>ちやう</sup>にも感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>して、11人<sup>にん</sup>皆<sup>みな</sup>さん<sup>さん</sup>全<sup>ぜん</sup>て<sup>て</sup>の委<sup>いん</sup>員<sup>いん</sup>に心<sup>こころ</sup>から感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>を<sup>を</sup>申<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>上<sup>じやう</sup>げ、私<sup>わたし</sup>の意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>す。

あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ご<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>した<sup>た</sup>。

